

## 武蔵野日曜聖書講筵 復活節

## 復活の本質

## ——ルカ伝第24章——

1993年4月11日

小池辰雄

われキリストと共に十字架せられたり 変幻自在・靈肉渾然 全的突入 死人の甦り 本来の  
 靈生が本現した なんぞ我を棄て給いし 二つの現実 キリスト直結 キリストと一つとなっ  
 てしまう 祈り

## 【ルカ24】

1 一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2 然るに石の既に墓より転まろばし除のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりしに、視よ、輝ける衣きを著きたる二人の人その傍かたわらに立てり。5 女たち懼おそれて面おもてを地に伏おせたれば、その二人の者ひという『なんぞ死しにし者ものの中に生なける者を尋たぬるか。6 彼は此こ処こに在いままず、甦よみがえり給たまへり。尚なほガリラヤガリラヤに居ゐ給たまへるとき、如何いかに語かたり給たまいしかを憶おもい出いでよ。7 即すなはち「人の子は必ず罪ある人の手に付つされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦よみがえるべし」と言い給たまへり』8 ここに彼らその御言おまを憶おもい出いで、9 墓より歸かへりて、凡すべて此等これらのことを十一弟子および凡すべて他の弟子たちに告つぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在ありし他の女たちも、之これを使徒しやとたちに告つげたり。11 使徒しやとたちは其の言ことばを妄語たわごとと思おもいて信まぜず。12 「ペテロは起たちて墓かたに走はりゆき、屈かみて布ぬのみあるを見、ありし事を怪あやしみつつ歸かへれり」

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔へりたるエマオと  
 いう村に往ゆきつつ、14 凡すべて有ありし事ことどもを互たがいに語かたりあう。15 語りかつ論まじあう  
 程ほどに、イエス自ら近づかりて共に往ゆき給たまう。16 されど彼らの目遮さえられて、イ  
 エスたるを認まむること能あたわず。17 イエス彼らに言い給たまう『なんじら歩あみつつ  
 互たがいに語かたりあう言ことは何なにぞや』かれら悲かなしげなる状さまにて立たち止とまり、18 その一人な  
 るクレオパと名なづくるもの答こたえて言う『なんじエルサレムエルサレムに寓やどり居ゐて、独ひとり  
 此この頃ころかしこに起おこりし事ことどもを知らぬか』19 イエス言い給たまう『如何いかなる事ことぞ』  
 答こたえて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡すべての民との前まへにて、業わざに  
 も言ことばにも能ちから力ちからある預言者よめいなりしに、20 祭司長ら及び我が司つかさらは、死罪しつゐに定め



んとて之を付し遂に十字架につけたり。21我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、22なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風く墓に往きたるに、23屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』25イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。26キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』27かくてモ一セ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。28遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。30共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えざり給う。32かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』35一人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。37かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、38イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、39我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40〔斯く言いて手と足を示し給う〕41かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』42かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、43之を取り、その前にて食し給えり。

● われキリストと共に十字架せられたり

午前の話は「復活の本質」と題しました。イエス・キリストというかたは驚くべき霊的生命のひとです。彼の言葉、彼の行為、これは我々のとは違う。その霊的生命はキリストだけがもっている生命なので、そういう霊的生命の中から発する言葉であり行為である。

「わが言は靈なり、生命なり」

と言われたのは、そういうわけです。

「潔まれ!」

と言えば、潔まつてしまおうし、



「治れ！」  
と言え、治つてしまおうし、

「起きよ！」

といえ、死人が甦つてくる。大変なことです。そういうキリストの霊的な生命に我々があずかることが本当の救なので、救のための救ではない。

「キリストと一つとなれば、おのずからそれが救である」

ということですが。救を目指した信仰ではダメなんです。救われようが救われまいが、とにかくキリストと一つとなること。これが我々の祈り入りでなくてはならない。「復活」と言うけれども、私は実は復活という言葉は気に入らない。キリストの本来の生命が現れただけの話で、復た息を吹き返したなんていうことではない。

十字架も——盗人の一番悪いのが極刑されるのが十字架ですが——その十字架に懸けられたというけれども、自ら捨てたんです。それは我々が本当にキリストの生命を受けんがために。その祈りは、ゲッセマネで非常に深刻な祈りをされました。

キリストの生命は正に霊生なんです。霊の生命です。霊生が本現することが、本当に現れることが、いわゆる復活なんです。だから、復活という言葉は私はあまり好きではない。霊生の本現です。霊生が本当に現れる。

十字架の贖罪は誰もできない、キリストだけができる。エゴイズムが「罪」ですから、この十字架の贖罪が我々のエゴイズムをすつ飛ばす。それが、別な言葉で言えば、救なんです。

パウロは、

「我は罪びとの首」

と言った。一番悪いやつだと。キリストを信ずる者を迫害した、殺した。そして、キリストの前に平伏すところでない、復活のキリストにぶつ倒された。本現のキリストが奢れるパウロをひっくり返した。

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と。私たちの生れながらの生命から、第二の誕生を、

「ひと新たに生れずば」

とキリストが言われた新しい霊生を受けなければ、空しい。だから、キリストの霊生の本現の前に、贖罪という大事な仕事を遂げられた。

「我には受くべきバプテスマあり。思い迫ること如何ばかりぞや」

というのが十字架のことです。そうしたら、キリストの霊生が現れた。パウロが、

「われキリストと共に十字架せられたり」

と言った。十字架ということをおもうのではない、私たちが本当にその現実に祈り入ることです。そうしたら、この霊生の本現にもたらされる。それが、魂の世界というと、聖霊を受け、ことになりす。



## ● 変幻自在・霊肉渾然

ルカ伝24章の所を見ます。

1 一週ひとまわりの初はじめの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2 然るに石の既に墓より転まろばし除のけあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍しかばね体を見ず、4 これが為ために狼狽うろたえおりしに、視よ、輝ける衣きを着たる二人の人その傍かたわらに立てり。5 女たち懼おそれて面おもてを地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死しにし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。6 彼は此こ処こに在いまさず、甦よみがえり給たまえり。尚なほガリラヤに居給たまえるとき、如何いかに語り給たまいしかを憶おもい出いでよ。7 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付わたされ、十字架につけられ、かつ三日めに甦よみがえるべし」と言い給たまえり』。8 ここに彼らその御言おまを憶おもい出いで、9 墓より歸りて、凡て此等これらのことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。11 使徒たちは其の言ことばを妄語たわごとと思おもいて信ぜず。12 「ペテロは起たちて墓に走りゆき、屈かがみて布のみあるを見、ありし事を怪あやしみつつ歸れり」

「女たち」といって一番先に出でるのはマグダラのマリヤです。マグダラのマリヤは七つの悪鬼がついていた女性なんです。完全にキリストに癒されてしまった。だから、一番キリストを慕ってやまなかった。いつも一番先に名前が出てきます。甦よみがえりのキリストに最初はじめに会ったのもこのマグダラのマリヤです。それから、エマオ途上みちのうへのことが書いてある。

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、14 凡て有りし事どもを互たがひに語りあう。15 語りかつ論じあう程ほどに、イエス自ら近づかぎて共に往き給たまう。16 されど彼らの目遮さえられて、イエスたるを認まむること能あたわず。17 イエス彼らに言い給たまう『なんじら歩みつつ互たがひに語りあう言ことばは何ぞや』かれら悲しげなる状さまにて立ち止とどまり、18 その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓やどり居て、独ひとり此の頃かしこに起おこりし事どもを知らぬか』19 イエス言い給たまう『如何いかなる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業わざにも言ことばにも能力ちからある預言者なりしに、20 祭司長ら及び我が司つかさどらは、死罪に定めんとて之を付わたし遂に十字架につけたり。21 我らはイスラエルを贖あがなうべき者は、この人なりと望のぞみいたり、然しかのみならず、此の事の有りしより今日ははや三日めなるが、22 なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝あ暁はやく墓に往きたるに、23 屍しかばね体を見ずして歸り、かつ御使たち現れて、イエスは活いきき給たまうと告げたりと言う。24 我らの朋輩ともがらの数人もまた墓に往きて見れば、



正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』<sup>25</sup>イエス言い給う『あ  
あ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。<sup>26</sup>キリ  
ストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』<sup>27</sup>かくてモ  
ーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き  
示したもう。<sup>28</sup>遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、  
<sup>29</sup>強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』  
乃ち留らんとて入りたもう。<sup>30</sup>共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて  
祝し、擘きて与え給えば、

「アツ、これはちよつと違つた」と言つて、

<sup>31</sup>彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。

そうしたら、キリストは姿を隠された。変幻自在なんですね、キリストの魅りの姿とい  
のは。これはとても考えられない。霊肉渾然たるものです。戸を閉じた所に入ってきたり、  
そうかと思うと、

「何か食べ物があるなら食べてみる」

と言つて食べられた。これは普通の神学者は信じない。

<sup>32</sup>かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我  
らの心、内に燃えしならずや』<sup>33</sup>かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、  
十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、<sup>34</sup>『主は実に甦えりて、シ  
モンに現れ給えり』<sup>35</sup>二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うに  
よりてイエスを認めし事とを述べ。<sup>36</sup>此等のことを語る程に、イエスその中  
に立ち『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。<sup>37</sup>かれら怖じ懼れて、見る所  
のものを霊ならんと思ひしに、<sup>38</sup>イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、  
何ゆえ心に疑惑おこるか、<sup>39</sup>我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて  
見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』<sup>40</sup>〔斯く言ひ  
手と足を示し給う〕<sup>41</sup>かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言ひ  
たもう『此処に何か食物あるか』<sup>42</sup>かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、<sup>43</sup>之  
を取り、その前にて食し給えり。

これは霊肉渾然たるものです。とにかく、我々の考えはとても及ばない。霊であると同  
時に肉でもある。霊肉渾然としている。しかも、それは戸の閉じた所に入ってきたりする。  
いかなる我々の判断をも超越したところの摩訶不思議な現実です。どんな空想も、ここ  
まで空想できないような現実なんです。ということは、キリストの生命というものは普通  
の肉体をとつて、

「我々と同じ肉となり給えり。ロゴスがサルクスとなった」

と、ヨハネ伝に書いてある通り、我々と同じ弱き人間に——泣いたり、笑つたり、食べたり、



眠ったりという——我々と同じ人間になりながら、その奥の生命体というものは、その霊生というものは、凄い霊生なんです。それでなければ、福音書に書いてあるような、これだけの言葉や業は出てこない。そういう驚くべきひとです。

### ●全的突入

ところで、「ヤイロの娘」というのがある。マルコ伝5章21〜43節、ルカ伝8章40〜56節。

「40 斯てイエスの帰り給いしとき、群衆これを迎う、みな待ちいたるなり。

41 視よ、会堂司つかさどにてヤイロという者あり、来りてイエスの足下に伏し、その家いへにきたり給わんことを願う。42 おおよそ十二歳ほどの一人娘ありて死ぬばかりなる故なり、イエスの行き給うとき、群衆かこみ塞ふたがる。

43 ここに十二年このかた血漏ちろうを患わずらいて医者いしやの為に己が身代しんだいをことごとく費したれども、誰にも癒され得ざりし女あり。44 イエスの後に来りて、御衣みぎの総ふさにさわりたれば、血の出づること立刻たちどころに止みたり。45 イエス言いたもう『我に触りしは誰ぞ』人みな否いなみたれば、ペテロ及び共におる者ひとも言う『君よ、群衆かたなんじを圍かこみて押し迫るなり』46 イエス言い給う『われに触りし者あり、能力ちからの我より出でたるを知る』47 女おのが隠れ得ぬことを知り、戦おのき来りて御前に平伏し、触りし故たちどころと立刻たちどころに癒えたる事とを、人々の前まへにて告ぐ。48 イエス言い給う『むすめよ、汝の信仰しんじゆなんじを救えり、安らかに往け』

キリストが、

「お前の信仰がお前を救った」

と言われた。よく、こういう表現をなさる。ルカ7・50、8・48、18・42にも出ている。

「汝の信仰、汝を救えり」

という言葉に躓かないようにしてください。我々の信仰が何ものかではない。相手を、神・キリストを絶対あきらなものとして受けとることが信なんです。こちらの信仰の

「信仰心がどうだこうだ」

ということではない。こちらは空っぽです。こちらは空っぽで、

「相手を全的に受けとろう」

ということ、それを信仰というなら信仰なんです。だから、信仰という言葉が時々躓きになる。私たちは身体の中で全身で、

「主さまー」

とすることが信仰なんだ。「主さまー」と叫べば——沈黙の叫びです——直ちにその中に入っていたく、吸い込まれる。全的突入です。



## ● 死人の甦り

49 かく語り給うほどに、会堂司の家より人きたりて言う『なんじの娘は早や死にたり、師を煩わすな』<sup>49</sup> イエス之を聞きて会堂司に答えたもう『懼るな、ただ信ぜよ。さらば娘は救われん』<sup>50</sup> イエス家に到りて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及び子の父母の他は、ともに入ること誰にも許し給わず。<sup>52</sup> 人みな泣き、かつ子のために歎き居たりしが、イエス言い給う『泣くな。死にたるにあらず、寝ねたるなり』

普通の観念では、実際は死んでゐるわけです。ところが、キリストは「死んだ」とは言わない。「眠っているんだ」と言った。

53 人々その死にたるを知れば、イエスを嘲笑う。<sup>54</sup> 然るにイエス子の手をとり、呼びて『子よ、起きよ』と言いたまえば、<sup>55</sup> その霊かえりて立刻に起く。イエス食物を之に与うることを命じ給う。<sup>56</sup> その両親おどろきたり。イエス此の有りし事を誰にも語らぬように命じ給う。(ルカ8・40〜56)

「タリタ、クミ！」(娘よ、起きよ！)

というヘブライ語です。そしたら、直ちに起き上がってしまった。キリストが「眠った」と言ったのは、本当は死んでいるのだけれども、死んでいる者を甦えさせた、生命を与えた。「ナインの若者」のことも書いてある。ナザレの南東の方にタブロ山という山があつて、それから少し南の方に行った所に、ナインという町がある。そこで葬式のところにキリストはでつくわした。若者の柩のそばでお母さんが泣いていた。寡婦のお母さんで、一人息子なんだ。その行列にキリストが近づいて行つた。

「泣きたちんよな」

と言つて柩に手を置いて、

「若者よ、お前に言う、起きよ！」

と言つたら、死人が甦えつて起きてきた。お母さんは驚き喜んだ。大預言者が現れたと、皆が言いだした。大預言者どころではない。キリストが、

「恵福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん」

と言つたのは、キリストはその実力を持つていらつしやるから、ああいうことを言われる。ナインの若者がそうやつて柩から甦えらされてしまった。それから、ラザロがそうです。マリヤとマルタの兄弟のラザロが新しく生命をいただいてしまった。正に、イエスは人を活かす霊です。霊生をもっているから、それが本現すると現象がそのように現れる。

## ● 本来の霊生が本現した

ルカ伝の9章、マタイ伝の17章、マルコ伝の9章に「キリストの変貌」のことが書いてある。衣まで光ってしまった。イエスが弟子たちをつれて、ピリポ・カイザリヤの地方を歩いて



いた時、ペテロがイエスの間に対して、

「あなたはキリスト、メシヤ、活ける神の子であります」

と告白した。ところが、十字架のことを言われたら、ペテロが

「そんなことはいけません」

と言ったら、キリストはいきなりペテロに、

「サタンよ、退け！ お前は躓き者だ」

と言われた。キリストは、

「十字架で自分は贖罪の死を遂げる」

ということを、

「彼の砕けによって云々」

というイザヤ書53章の預言を達するということを既に自覚しておられた。けれども、いよいよ十字架に懸かる前の祈りでは、キリストは血の涙を流した。

「人もし我に従い来らんと<sup>きた</sup>思わば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え」

というのはキリストの言葉です。だから、我々が

「キリストを信ずる」

とか言っても、本当に「キリストを信ずる」ということは信従することなんです。信じ従う。我々は一人びとりみな十字架をもっている。それを一人びとりは背負っていく。

「我が為また福音の為に己が生命をうしなう者は、之を救わん」

「我が為に己が生命を棄てる者は本当の生命を、霊生を得るぞ」

と言う。ありがたいことに、キリストは霊生ですから、これに従うと力がくる。

「信仰は言に非ず、力なり」

と、パウロはその力をいただいた。霊生の力です。

私は何歳まで生きてるか知りませんが、本当は永遠の生命、霊生がある。キリストを本当に受けとれば、あなた方一人びとりの中に、奥に霊生が来ている。いつ死んでも

「アーメン・ハレルヤー！」

です。人間のいわゆる思想にはそんなものは出てこない。「何々思想史」なんて大したことない。いくら素晴らしい哲学でも、哲学では一人の人も救われない。

「ナインの若者」が活かされてしまった。「ヤイロの娘」が活かされてしまった。キリストは「生命を与える霊」です。だから復活というのはおかしな言葉です。そうやって、皆死んだものを活かしてしまう。その時には新しい霊がそこに入ってくる。いわんや、キリストの復活というものは息が吹き返ったのではなく、本来の霊生が本現しただけのはなしです。霊生が本現したことがいわゆる「復活」という言葉です。



● なんと我を棄て給いし  
十字架で、

「わが神、わが神、なんと我を棄て給いし」  
と言われた。

「棄てられるはずではありませんでしたよ。完全にあなたに従ったではないですか」と、キリストほど現実には神さまに従った人はいないわけです。本当に完璧に従った。

「その私をなぜお棄てになるか」  
と。ということは、あれは神とのこの全き関係に対する逆説的な言葉です。

「棄てるはずのものではないではないですか」  
ということが、

「なんと棄て給いしか」

ということなんです。逆説的な叫びです。彼らは為すところを知らず。赦してや  
つてください」

と。バラバという一番悪い奴が許されて、キリストが十字架に懸けられてしまった。今までさんざんキリストに救われて恵みを受けた民衆がみなひっくり返ってしまった。民衆というのは愚衆なんだ。キリストに背いてしまった。祭司たちの宣伝にもよっているけれども。人間の神への反逆、これを「罪」という。神との縦の関係が切れていることを罪という。その関係を新しく立て直す、それがキリストの「十字架と聖霊」の事態なんです。縦の関係が本当に立ったところを平安という。

「汝ら、安かれ」  
というのがそのことです。

「平安を与えるぞ」  
ということなんです。平安があれば今度は平和がくる。平安なき平和なんてものは偽りの平和です。

ランケが、  
「各民族は神に直結する」

と言った。その直結を失って、民族闘争なんか、何をやっているかと言いたい。戦争、争いというのはみな要するに、神との関係が切れた所に生ずる。日本のいわゆる民主主義はダメです。

「アンダー・ゴッド（神の下において）」  
ではないから。リンカーンが、

「アメリカの政治は永遠に、神の下におけるところの、民の、民によるところの、民のための政治でなければならぬ」



と言った。ゲチスバーグの戦いの後の有名な三分間演説の中の句です。日本の民主主義は「ア  
ンダー・ゴッド」（神の下において）を抜かしてしまった。神がないからダメなんです。アメ  
リカでは、首相に就任する時にもみなちゃんと聖書に手を置いてやる。日本は本当に情け  
ない。そういった本当の宗教の世界をもたないから。教育だつてそうだ。先生が本当の宗  
教をもたないから、本当の教育ができない。西郷南洲は、

「敬天愛人」

と言った。天を敬し、人を愛する。維新当時の大人物は南洲の他にいないと私は思っている。  
み霊の世界では何でもつかまえることができる。キリストの霊というのは本当にすごい  
から、何でもそれをちゃんと位置づけることができる。私は本当に尊敬すべきものは無条  
件に尊敬します。それが「仏教だからどうだこうだ」なんて、そんなことは思わない。キ  
リスト道と仏道の人物はどれも素晴らしい。

一遍上人とアッシジのフランシス、これが東西の一番素晴らしい天的な人物だろうね。  
フランシスというのは、小鳥がなついて小鳥と語るようなひとだから。草花とも話す。宇  
宙愛です。差別がない。「太陽のうた」という素晴らしい詩がある。

パウロが言っているとおり、

「山を動かすほどの信仰があつても、愛がなければ……、愛がなければ……」  
と言っている。愛だけが万象を活かすものです。

## ●二つの現実

「<sup>39</sup>十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリス  
トならずや、己と我らとを救え』<sup>40</sup>他の者これに答え禁めて言う『なんじ同  
じく罪に定められながら、神を畏れぬか。<sup>41</sup>我らは為しし事の報を受くるな  
れば当然なり。然れど此の人は何の不善をも為さざりき』<sup>42</sup>また言う『イエ  
スよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』<sup>43</sup>イエス言い給う『われ誠に  
汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』」（ルカ23・39～43）

この会話は素晴らしい。片一方はキリストを嘲っているような奴。もう一方は、  
「悪いことをしました。申し訳ありません。せめても、私を覚えてください」

と言った。人類はこの二つに分かれる。神に対する傲慢、傍若無神の者。それと、心砕け  
て「申し訳ありません、せめても……」と言つて平伏す者。こちらは、

「今日、お前は私と一緒にパラダイス」

だ。こちらは心をめぐらした。回心した。そうしたら、キリストと一緒に身体までめぐら  
されて、回身して天界に往つてしまった。他方は高慢、傲慢で、これは地獄行きだ。

また、第三の人たちがいます。全然、神も仏も知らないひとたち。けれども、純真な人  
がいます。そういう人は、神さまの方から上へあげるでしょう。いわゆる宗教心がなくても、



真まことの人がいます。とにかく、我執がしゅうが罪だから、高慢・我執は落とされる。すぐ人を批判してみたり、自分をよしとする自己義認じぎにんというものはダメなんだ。

我々は「キリストの復活」なんて言うけれども、本現すげんのキリストの相すがたにいよいよ現れたもうたということが、靈肉渾然こんぜんたる姿にキリストが現れたのがいわゆる復活なんです。だから、地上に現れたキリストはもちろん靈生のすごい存在でありましたけれども、それともう一つ高い次元と言ってもいいくらいです。復活なんて言うより、靈的本現、靈生の本現です。だから、靈生の本現たるキリストは今、靈界に生きておられるから、その働きによって動いているのがこの聖靈の世界です。靈の現実というのはいよいよ。靈の生命です。「靈生」の「生」の字は、今度は「靈性」と書いてもいい。靈生をいだけば、その性質は靈性になる。

私は、自分で言うてはおかしいけれども、詩を書きながら、時々グッと次元的に飛躍をさせられる。ありがたい。宇宙的な魂になる。

何かこだわっていると、自分自身がダメになります。絶対にこだわってはいかん。それが正に禅宗でいう「身心脱落」ということです。生まれながらの身心が脱落して、靈生が本当に入ってくる。禅宗では、そこでは無の世界だ。無の世界は無私だ。その無の世界に入るのが禅宗の修行なんだけれども、禅宗は御苦労さんだ。悪いとは言わない。キリストの靈生に入ると、これが本当に身心脱落なんだ。

相対的な人間は二重構造です。二重構造ですけれども、平伏していけば、この脱落の本当の現実がいつも勝って進んでいくわけです。それは平伏しの魂です。平伏さなければダメです。平伏すと、もうひとつ言うと、一遍上人がその世界なんだ。

「弥陀の本願の力が一切を救う」ということになる。

「こつち側の信仰がどうだ」

なんていうことは問題でない。それはそうです。キリストの十字架・聖靈の恩寵は絶対だから、

「こつち側はどうだこうだ」

は要らないということと同じです。自おのずから身心脱落させられてしまう。それを私は根源現実と言います。私には本当の現実と、相対的な現実と、二つある。その根源の現実は何もない世界、もう地上において既に天国なんです。地上で、天国人てんごくじんです。

### ●キリスト直結

そういう世界は、普通の教育や、小学校から大学に到るまでダメだね。だから、教育者それ自身がものすごい宗教をもたなければダメなんだ。宗教の素晴らしさというものをみな誤解している。誤解、認識不足、誤認している。



宗教の世界は、誰が何をやるうとも、全部その人の根底にはなければならぬ。実業家であろうと、政治家であろうと、医者であろうと、教育者であろうと、何をしても、男でも女でも、その人の本来のすがたは、

「神・仏の霊生の世界を本当に根源現実として有<sup>も</sup>っているか、もっていないか」

それだけです。それは本当の平安の世界です。何もかもこれを崩すことはできない。

いわんや、キリストはお釈迦さんとはケタが違う。天上天下東西古今に、イエス・キリストと比べる者は一人もない。正直、大変なひとだ。聖書の霊的な真理というものは世の終りまで、新天新地がくるまで滅びない。だから、その新天新地、黙示録で約束している世界に対する大希望をもって我々は進んでいく。既に天国人とされながら、本当の天国を、最後の新天新地を目指していく。まあ、21世紀はどんなことになるかね。いいよ、どうなったって。何もものもどうすることのできないところの驚くべき世界です。

普通のいわゆる信仰なんて、お気の毒になる。

「この意味はどうだこうだ。礼拝の仕方がどうだ」

なんて、そんなことばかり詮索している。本当の自由というものは、マルチン・ルターが『クリスチャンの自由』を書いたけれども、あれでもまだ足りない。むしろ、カトリックに素晴らしい人がいる、フランシスとか、ザビエルとか。私はカトリック組織は嫌いだ。法王なんか作ったり、そんな組織はひとつも要らない。その中のカトリックの異端者みたいなのが本当のカトリック、本当のキリストの弟子です。だから、我々は

「キリスト直結」

と言えばいい。

「プロテスタントでも、カトリックでもありません、キリスト直結です」

とはつきり言わなくてはダメです。

「使徒的信仰」

です。使徒たち、パウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ。まあ、たくさんいたって、結局残ったのはこの四人だ。あなた方お一人お一人が一人一召団でいい。ダンテという詩人はそういう気持で生きていた人です。「一人一党」と言った。結局、問題は「個」なんです。

「人、生命を失わば全世界を得るとも何の益あらん」

とキリストが言った。その生命、霊生を失ったらどうにもならん。

「我もはや生くるにあらず、キリストわがうちにありて生き給うなり」

というパウロのあの告白です。

「私の生きているのはキリストだ」

と。直結だと言ったのは、

「キリストが生きているのであって、私が生きているのではない」

ということですよ。



「我生く、されど、我にあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」と、あのパウロの現実は凄い。信仰なんていう言葉を使わなくてもいい。

### ●キリストと一つとなってしまおう

伝道しておられた時まで、キリストの知られざるところの18年間。12歳のキリストの消息はちよつと分かつていた。寺院で僧侶たちと言ひ争いをしていた。その後、18年間、何をしていたかは全然分からない。どこまでも、キリストは経典を読んで、そして祈られた。それでできあがった。それで、いよいよサタンとの一騎打をして、それから伝道にかかられた。

「聖書はドラマである」

と言ったでしょ。我々は聖書のそのドラマの中に自分を入れて、キリストの直弟子になり、キリストと一つとなつてしまふ。そういう読み方をしたら、大変、楽しいわけです。五千人の人にパンを分けたり、キリストは大変なひとだよ。

「復た<sup>ま</sup>本当の靈生に変えられました」

という復活です。

「十字架に懸かつてそれつきり」

なんていうキリストなんて、これほど不合理なことはないわけです。

「キリストの復活を信じますか？」

なんて、そんな質問の応答をしている暇はない。

この召団は、あなた方は人数ではない、あなた方一人びとりが、一人が本当に日本を背負っているような気持でやってください。

「我は日本の柱なり、大船なり」

と日蓮が言った。

何を読んでも、それをちゃんと位置づけができます。これがキリストの世界の素晴らしさです。

私は自分のことを「天弓」と号している。天の虹です。太陽の光も無色、水滴も無色。ところが、虹の七色に現れる。実は無限色、無即無限無量です。無者というのはそういう無です。私たちはキリストの無者なんだ。我無き者。ところが、この無者は無限無量者なんです。無限無量の内容は聖霊です。無即無限無量ということ。虚無ではない。そういう無の世界。これは本当に賜りたる無私の世界です。

「賜りたる」

だよ、悟ったのではない。十字架で賜った無私の世界、我無き世界です。無限無量というのは聖霊の世界です。

我無き世界は十字架の世界。十字架で無にされた。そしたら、無限無量の聖霊の世界に入れられた。だから、



「十字架と聖霊は分けることができない」  
と言っている。無即無限無量だから、行き詰まらないから、ありがたくてしようがない。自分の信仰でないから、行き詰まらない。

「私の信仰は」  
なんて言って自分の信仰を考えていたら、行き詰まってしまう。私は、  
「信仰なんかありませんよ」  
と言う。

ナインの若者とか、ヤイロの娘とか、ラザロとか、あれを息を吹きかえさせて、そして生かした。そのキリストの霊生の驚くべきこと、これは忘れてはいかん。我々もそのキリストの霊生でもって生きるので、いわゆる復活ではない。

### ● 祈り

では、祈ります。

驚くべき霊生のまさま。あなたが十字架に架かり、一切をなしとげ、

「彼らを赦してやってください」

と十字架から祈られた、そのみ言葉の深いご愛を思います。あなたが十字架上で叫ばれたら、至聖所と聖所の間の幕が切れました。驚くべきことでした。旧約の世界がすでに乗り越えられて、新しき新約の、あなたの生命の世界が、光の世界が、愛の世界が展開してくるところのペンテコステへの、その序曲として驚くべき事態をうけたまわり、ありがとうございます。

この兄弟姉妹たちは、それぞれ本当に聖書を身体でもって読み、そして、読むことが直ちに食らうことであり、直ちにあなたの生命にあずかることであることをいよいよ体験して進んでいきます。どうぞ、この兄弟姉妹たちの一人びとりをそのようにしていよいよ鍛えまた祝福して、光の中に、生命の中に入れてくださらんことを心からお願いたします。今、このようにして午前の集会を終わることができ、聖名を讃えただけです。どうぞ、午後の感話懇親会また祈禱会を、今日の復活節らしく送ることができますようにお願いいたします。

心からの感謝と讚美、兄弟姉妹たちの、特に今日新しくまた久し振りで来られた兄弟姉妹たちの、その全身にあふれる感謝と讚美とともに、聖名にあつて捧げたてまつる。アーメン。

